『酒呑童子』研究

金井香代子

一 『酒呑童子』の成立

酒呑童子の物語には、京都府大江山を舞台にしたものと、滋賀県伊吹山を舞台にしたものとの二種類の話型が存在する。それら二系統ともに、物語の内容は共通している。二種類の話型のどちらかがもう一方を踏襲して成立したと考えるべきであろう。

それでは、大江山系と伊吹山系では、どちらが原形となるのであろうか。佐竹昭広氏は、『酒呑童子異聞』において、伊吹弥三郎退治の伝説が頼光の酒呑童子退治譚と結びつき、そこから伊吹山系の物語が誕生したと述べている。[1] となると、伊吹山以前の酒呑童子退治譚が必要となる。そこで生じたのが、大江山系の物語なのであろう。

酒呑童子の住処のあった大江山とは、どのような場所であったのだろうか。現在の京都府には、「おおえ」と呼ばれる土地が二箇所ある。どちらの地にも酒呑童子にまつわる伝説が存在する。ひとつは丹後・丹波国境（現加佐郡大江町と与謝郡加悦町の間）にある「大江」であり、もうひとつは山城・丹波国境の大枝山（現亀岡市と京都市西京区の間）にある「大枝（老ノ坂）」である。前者の大江山には、酒呑童子の住処であったことを示す旧跡がある。だが、後者の大枝山に現存する首塚大名神の由緒碑には、老ノ坂は単なる通過点であり、大江山に住んでいた酒呑童子の埋葬地であると書かれている。

『今昔物語集』の「具妻行丹波國男、於大江山被縛語」（巻二九―二三）の大江山は、老ノ坂である。また、『平安遺文』の三四五号（正暦二年／西暦九八一年）にも老ノ坂で強盗集団に襲われたという記事がみられる。十世紀末には、老ノ坂は盗賊が出没する恐ろしい場

所であるという認識があったと推測される。老ノ坂には女を攫う鬼が住んでいるという物語ができる土壌があったのである。また、大江山は京都からみて西北の位置にある。西北は黄泉の国のある方角である。[2] もともとは大枝山であった酒呑童子の住処が、大江山に移り変わっていったのであろう。

では次に、酒呑童子の物語がどのようにして生まれたのかということについて考えてみたい。

黒田彰氏は『中世説話の文学史的環境』において、酒呑童子の物語と、「補江総白猿伝」との関わりについて指摘している。[3] 「補江総白猿伝」は唐の小説であり、「欧陽紇」と題して『太平広記』にも収められている。では、なぜ「補江総白猿伝」の白猿を酒呑童子におきかえた物語がうまれたのであろうか。

その解決策として高橋昌明氏は、『酒呑童子の誕生』に「猩々」の存在をあげている。[4] 猩々は疱瘡対策に効力を発揮する霊獣であったという。あるいは、疱瘡を引き起こす疫霊そのものと考えられていたのかもしれない。高橋氏は酒呑童子の原像は、疱瘡を流行させる疱瘡神だとも述べているので、[5] 猩々＝疱瘡神なので、酒呑童子＝猩々ということになり、猿と酒呑童子が結びつく。白猿伝における敵役が猿であったことが、疱瘡神である猩々に繋がり、白猿伝を下敷きとした疱瘡神除けの物語、すなわち『酒呑童子』ができたという仮説が生じる。

ではなぜ酒呑童子の物語が大江山を舞台として語られたのであろうか。酒呑童子の物語の舞台となった、丹後・丹波国境にある大江山には、三種類の鬼退治譚がある。[6] その鬼退治伝説のうち、最も古いものが『丹後風土記残欠』にみられる日子坐王（ひこいますのおおきみ）による陸耳（くぶみみ）退治である。もう一種類は、麿子（まろこ）親王の物語である。麿子親王は聖徳太子の弟であるため、中世に流行した太子信仰との繋がりから『酒呑童子』以降の物語であると高橋氏は述べている。だが、『風土記』に書かれた日子坐王の物語が、『酒呑童子』に先行していることは確かだと思われる。日子坐王に追われたまつろわぬ者が大江山へ逃げ込んだという伝説から、大江山が鬼の住処であるという物語が作り出されていったのであろう。

こうしてみてみると、当時流行していた疱瘡の原因を鬼にみたて、既製の物語に脚色を加えてゆくことによってつくられた、勧善懲悪の物語という『酒呑童子』の成り立ちと骨格が浮かび上がってくるのである。

二　酒呑童子と頼光四天王

酒呑童子は昼間、禿頭の大童の姿をとる。しかし夜になると赤い髪に角のある鬼の姿へと変化する。次は、このように昼と夜とで全

く異なる姿を現す酒呑童子の、その姿と名前の意味について考えてみたい。

異形の物語のなかには、初めは人の姿をしていたものが、ある時を境に突然本性を現すという話型がよくみられる。もとは異形の存在だったとしても、人の形をしている時には、人としての行動をとることが常なのである。しかし、酒呑童子は人の形をしている時も、人から絞った血を酒として飲み、切ったばかりの腕と股を肴とする。なぜ酒呑童子は外見が人間であるときから、既に鬼としての性質を窺わせていたのであろうか。この物語には何人かの鬼が登場するが、酒呑童子だけが人間の姿をとる。これは、酒呑童子の力の強大さを表す演出であろう。人肉を食らい、血を飲むということも、酒呑童子の異常さを示す演出かもしれない。もちろん、頼光たちを脅かすためという要因もあったであろう。

また、酒呑童子は子供でもないのに、「童子」という名で呼ばれている。酒呑童子が昼間、禿頭の大童の姿をとることが、その「童子」という名の由来となっているのであろうか。だが、渋川板『酒呑童子』では、酒呑童子以外の鬼は皆、昼間も鬼の姿で描かれている。とすると童子名は大童の姿とは必ずしも結びつくわけではない。

「童子」には「七歳以上元服までの幼い者で僧の弟子となったもの」という意味もある。酒呑童子の「童子」は、かつて酒呑童子が稚児であったこととの関連があるのかもしれない。酒呑童子は自らの口で稚児であった過去を語っているからだ。

昼間の酒呑童子における外見上の最大の特徴は、禿頭であるということである。禿頭は子どもの髪形であると同時に、神に仕えるものの髪形でもあった。[7] そして、それは同時に天皇に支配されるべきものの髪形であることを意味する。酒呑童子は天皇に支配されるべき存在であり、それはその髪形に証明されていた。しかし、その酒呑童子が天皇に反していたため、頼光たちに討たれることになったのである。

では次に頼光四天王について述べてみたい。酒呑童子討伐の勅命を受けた源頼光は、源満仲の子である。源頼光という人物は実在する。頼光四天王はどうであろうか。

頼光とその四天王の異形退治譚は、『平家物語』巻第十一の第百八句「剣の巻」、謡曲「土蜘蛛」・「羅生門」、『古今著聞集』巻第九「源頼光鬼同丸を誅する事」等に代表される。頼光四天王といえば、碓井貞光・卜部季武・渡辺綱・坂田公時の四名のことである。しかし、これらの四名が頼光の家来であり、さらに四天王と呼ばれていたという話は前述のような説話集や物語にしか見られない。

碓井貞光・卜部季武・渡辺綱・坂田公時の四名を本当に頼光が遣っていたのか。また遣っていたとしても、彼らを本当に四天王と呼ん

でいたのか。それらを確かめる術はない。しかし、武勇で知られる源頼光は、それなりの武勇の持ち主を何人も遣っていたことは違いないだろう。

頼光と共に酒呑童子討伐の勅命を受けた藤原保昌は、和泉式部との恋物語によって有名である。和泉式部の娘、小式部が詠んだ歌「大江山いくのゝ道もとをければまだふみもみず天のはしだて」が示す通り、保昌は和泉式部を連れて丹後に行っていたことがある。

また、現在に伝わる保昌と和泉式部の物語からの産物として、祇園祭の山鉾のひとつ、保昌山がある。これは、応仁の乱以前の起源を持つ。明治初年までは、花盗人山と呼ばれており、保昌が和泉式部のために紫宸殿前の紅梅の枝を手折ってくる姿を表す。[8] 祇園祭は疫病を流行らせる疫神を慰めるものとして始まった。[9] 疱瘡神も疫神なので、前述の酒呑童子が疱瘡神であるという前提のもとに、保昌と酒呑童子との繋がりをここにも見出すことができるのである。

三　退治される「鬼」

『酒呑童子』の冒頭部分には、神国である日本が仏教をとり入れたにも関わらず、土着の神を排除しようとしていることへの問題提起がなされている。この後、話は酒呑童子を退治するという方向へ進んでゆく。なぜ酒呑童子は退治されるのだろうか。また、退治される「鬼」とはどのような存在であったのだろうか。

「鬼」も「神」も人に崇る存在である。それなのに、「鬼」だけが悪い存在として、酒呑童子や八岐大蛇のように「神」の手によって退治されている。かつて天皇は神であると信じられていた。しかし、同じく神と呼ばれる存在でありながら、「鬼」のみが迫害される存在となっている。

天皇のルーツ天照大神とは異なる系統の持ち主であった土着の神々は排除され、かつて神であったという事実を押し隠すために「鬼」と称されるようになったのであろう。「神」が天皇であったとすると、「鬼」は天皇以外の王であったのかもしれない。勢力争いに負けた王が、勝者である朝廷から「鬼」という負の称号を与えられたのではないか。天皇に従わなかった酒呑童子は、その罪によって「鬼」として排除されることになったのであろう。

「鬼」と呼ばれる存在に鉱山労働者がいる。[10] 実際、大江町から大江山に至る道の途中には銅採掘場の跡がある。酒呑童子が金鉱の技術を持った鉱山労働者であったとしたら、頼光に酒呑童子征伐の勅命が下った理由は何であろうか。酒呑童子が疱瘡神や土着神であるならば、天皇の治める世には必要のないものという理由から排除され、征伐されるのも説明ができるが、金工の技術を持っている者を

排除することは、まずありえない。だが、酒呑童子は退治される。それはなぜなのか。

金工の技術は誰もが持っているものではない。ごく少数の者の、限られた知識に基づくものであったに違いない。古代人にとって、金工技術を持っている人は、普通ではない、異常な存在であっただろう。だが、それは権力者にとっては、恐れると同時に、手に入れたい存在であっただろう。金工技術を持っている人を所有することは、金属製品を手に入れたも同然である。

酒呑童子の征伐は、退治するためではなく、征服するために行われたのかもしれない。金工技術を持っている酒呑童子を退治してしまうと、その技術を手に入れることはできない。しかし、酒呑童子を服従させることができたならば、金工技術を手に入れることができる。頼光は酒呑童子を征服するようにとの勅命を帯びて、大江山にやって来た。頼光たちに征服された酒呑童子たちは、新しい支配者を受け入れざるをえない。つまり、それまでの自分たちを捨てなくてはならない。それを「退治された」と表しているのかもしれない。

退治される「鬼」とは、新しい勢力によって排除された、あるいは吸収された存在のことなのであろう。「勝てば官軍」という言葉があるように、生き残ったものが正しいのだ。もうなくなってしまった存在に対しては、どんなことでもいえる。『倭名類聚抄』には、「鬼」は「於爾」であり、「隠」の訛りであると書かれている。新しい存在によって、排除されたり、吸収されたりした存在は、隠れた所でのみ、元の存在に戻ることができるというのだ。だが、もう退治され、いなくなってしまった存在に対する悪口は、陰でこっそりと囁かれるものである。隠れた所で噂されるものだからこそ、鬼は「隠」と呼ばれたのかもしれない。

四　退治する「人」

御伽草子『酒呑童子』によると酒呑童子の退治には、勅命によって源頼光に加えて碓井貞光・卜部末武・渡辺綱・坂田公時の四天王と藤原保昌が派遣される。頼光と四天王たちの五名は、酒呑童子以外にも異形の存在を退治している。だが、この『酒呑童子』には、彼等のそうした経歴は描かれていない。「異形退治といえば頼光」という考えに即して頼光を異形退治の主役にすえた可能性もある。だが、仮にそうであったとしても、なぜ頼光たち五人が異形退治のエキスパートとなったのかという問題が生じてくるのだ。

高橋昌明氏は『酒呑童子の誕生』において頼光は「よりみつ」ではなく、「らいこう」であるから異形退治に選ばれたと述べている。[11] 頼光は雷公と音が通じる。また、藤原保昌も、その名を音読みする

と「ほうしょう」で方相氏と音が似ている。方相氏とは、追儺の時に玄衣朱裳の姿で戈と楯をもって疫鬼を追う役である。頼光は「らいこう」であるがゆえに、保昌は「ほうしょう」であるために、異形退治に選ばれたというのだ。酒呑童子が疫神であったことを思うと、方相氏である保昌が酒呑童子を退治することも頷ける。

頼光や保昌はその名前からして異形退治にふさわしい。しかし、問題は頼光四天王の存在である。彼らが頼光の家臣であったという確証はなく、そもそも実在した人物かどうかも怪しいのだ。だが、彼らは頼光の家臣として酒呑童子を退治する。普通、四天王といえば、仏教における、東方持国天・南方増長天・西方広目天・北方多聞天のことである。頼光の家臣が四人で「四天王」と呼ばれているのは、この仏教の四天王に由来する。しかし、頼光の家臣は、初めから四人だったのだろうか。

『今昔物語集』「頼光郎等共、紫野見物語」（巻二八―二）には「平貞道・平季武・□公時」の三名が登場するが、綱は登場せず、四天王という名称も使用されていない。「頼光の家臣である渡辺綱」は後世になって創作された人物なのかもしれないのだ。そうだとすると頼光四天王は、頼光の家臣であった碓井貞光・卜部末武・坂田公時の三名に渡辺綱を加え、四天王の形にしたことになる。誰よりも活躍する渡辺綱こそが、後から付け加えられた人物であるのだ。綱が加わる前の頼光四天王は、三名で構成されることになるので、四天王とはいえない。四天王と呼ばれなければ、仏教の四天王にあやかったような、強い力を持つことはできない。彼らは他の人と比べると、武勇に長けているかもしれない。だが、綱が加わることにより、「四天王」と呼ばれるということは、本来の四天王である、持国天・増長天・広目天・多聞天の力を借りることに繋がる。つまり、四人目の綱こそが、頼光四天王のカギを握っているのだ。だからこそ、四天王のうち、綱が最も活躍するのだろう。

頼光と公時は、雷神に繋がるものを持っている縁から異形退治に選ばれた。保昌は方相氏に繋がる縁から選ばれた。そして、頼光四天王は、仏教の四天王に繋がる縁によって選ばれた。頼光・保昌や四天王は、鬼退治に向いていそうなものを持っている。しかし、それは彼らの本来の力とは別である。それが、自分の力ではなくても、「鬼」に対抗するものに通ずるものを持っていれば、誰にでも鬼退治は可能ということなのであろう。

五　助力する「神」「仏」

頼光たちの一行は酒呑童子征伐へ赴く前に、それぞれ神の加護を頼みに行く。頼光と保昌は八幡へ、綱と公時は住吉へ、貞光と季武

は熊野へと参詣する。後にそれらの神々が酒呑童子征伐の手助けをすることになる。

なぜ一行は数ある神社のなかから八幡・住吉・熊野の三社を選んだのだろうか。そして、なぜその三社の神々は頼光らが酒呑童子を征伐する手助けをしたのであろうか。逸翁本[12]に見られる日吉大社とともに、その理由を考えてみたい。

頼光は勅命により、酒呑童子の退治に出かけた。それだけで頼光等は天皇に準ずるものとして扱うことができる。酒呑童子を討伐したのは頼光等六人でありながら、その背景にあるのは天皇なのである。また、八幡神は源氏の氏神であるため、頼光を守護する為に登場したと考えることができる。

高橋昌明氏は、住吉・八幡・日吉の三社には、疫病除けのご利益があると指摘している[13]。酒呑童子が疱瘡神であるのならば、「疫病除け」に効く神の力は借りずにはいられないであろう。現在は、科学的根拠のもとに、病気の治療をする。しかし、古代においては、病気は神仏によるものだと考えられていたからだ。それでは、残る熊野に関してはどうであろうか。

「小栗の判官」において、小栗判官は熊野湯の峯川の中にある壺の湯に入ったことにより、癩病から生まれ変わる。熊野は「癩病」という疫病に効果があると信じられてきた。つまり、熊野にも住吉や八幡と同じように、疫病除けのご利益があったのだ。疫病の原因を断つためには、疫病除けの神の加護が必要となる。よって、頼光たちは、疫病除けの霊験の現かな八幡・住吉・熊野の三社に詣でたのかもしれない。

神々に貰った神便鬼毒酒を飲んだ酒呑童子は、酔って頼光等に昔語をする。その昔語とは、「酒呑童子は越後の山寺にて育ったが、多くの法師を刺し殺したため出奔し比叡山に着いた。そこに住もうと思ったが、伝教大師という法師により追い出された。伝教の力に及ばなかったのでこの山に住んでいたら、弘法大師という者が法力によってここからも追い出した。だが、現在弘法大師は高野山に禅定に入っているので、そのような力の強い法師はいない。よって今ではこの山にいても誰にも邪魔されることがない。」というものである。伝教大師が日本に持ちかえった天台宗と、弘法大師の持ちかえった真言宗は、ともに国家仏教の柱である。鎮護国家のための仏教であるのだから、国家を護るための働きをするはずである。よって、酒呑童子は国家を護る為に排除されたことになる。

比叡山の土着神であった酒呑童子は、その地に新しく入って来た仏教により排除された。しかし、土着神が新しく入って来た仏教に吸収され、寺院の守護神となる例もある。

『醍醐寺縁起』[14]によると、根本尊師が仏法相応の地を探して七日

間祈っていた所、五色の雲が笠取山の峰に聳え立っているのが見えた。その谷に、一人の老翁がいた。尊師が老翁に「この場所は寺院建立に相応しい場所か」と尋ねると、老翁は「ここは仏法に向いている所だ」と答えた。そして、その地に醍醐寺が建立されたという。ここで見落としてはならないのは、老翁が「我為此處之地主也。」という点である。この老翁とは、土着神のことであろう。割注には、「横尾明神是也」とある。横尾明神は自ら寺の守護神となることを約束している。しかし、この物語には描かれることのなかった、土着神と新しい宗教との争いが存在した可能性も捨てきれない。酒呑童子が伝教大師によって追い払われたように、横尾明神も根本尊師によって追い払われそうになったに違いない。だが、横尾明神は追い払われずに残っている。きっとその地に残るために、寺を守護するという交換条件をのんだのであろう。そして、比叡山にいた酒呑童子は、伝教大師側の出した条件をのまず、そこを放逐されたのであろう。

酒呑童子がただの土着神ではなく、疱瘡神だとしたら、伝教大師や弘法大師の表しているものは何だろうか。古代において、病を治すために神仏に祈願したというのは、前述の通りである。その際、祈る手段として、加持祈祷が行われた。酒呑童子が住んでいた土地を追われたのは、疫病退散の祈祷が行われたことを示しているのかもしれない。

酒呑童子征伐の手助けをした神々は、疫病除けのご利益を持つ。さらに、頼光以前に酒呑童子に打撃を与えることのできた、伝教大師と弘法大師は、国家仏教の具現者である。そして、彼らは病気平癒や疫病退散の祈祷を行うことのできる存在でもある。よって、「鬼」である酒呑童子を退治したのは、天照大神から派生した天皇家であり、国家であるということができる。また、それら全てが、疫病に対抗しうる力を持っていることも、見落とすことはできない。

おわりに

酒呑童子とは、何なのか。その答えを知りたくて、酒呑童子伝説のある地を訪ねた。しかし、その疑問に対する答えは未だ見つからない。「酒呑童子は退治するべきもの」と考えることもできるし、「頼光たちは侵略者である」と考えることもできるからだ。国家の運営に弊害を与える酒呑童子が悪なのか。それとも後から来たにも関わらず、居場所を乗っ取った天皇側が悪なのか。

日本人には「判官びいき」というものがある。強者よりも弱者に心が惹かれるのである。「力が強い」という点においては、酒呑童子は頼光や公時とは比べものにはならない。しかし、すでに倒されてしまった酒呑童子は、かわいそうな弱者である。現在、人々が鬼

を「退治されるべき存在」として認識していることは、鬼を悪とする考えが普及していることを示している。だが、「判官びいき」により、酒呑童子に心を寄せた者もいただろう。

悪いことをする鬼は、悪くなかったかもしれない鬼である。権力におもねる人々は、鬼を「退治されるべき存在」として語ってきた。しかし、「鬼」が「悲劇のヒーロー」であった可能性から私は目を背けることはできない。

注

(1) 高橋昌明『酒呑童子の誕生』(中公新書　一九九二年) 三十頁
(2) 柳田国男「風位考」『定本柳田国男集』第二〇巻(筑摩書房　一九六二年) 二七二～二八〇頁
(3) 黒田彰『中世説話の文学史的環境』(和泉書院　一九八七年) 三七四頁～三八八頁
(4) 高橋昌明『酒呑童子の誕生』二五頁
(5) 高橋昌明『酒呑童子の誕生』二二頁～二六頁
(6) 高橋昌明『酒呑童子の誕生』一五〇頁～一七四頁
(7) 馬場あき子『鬼の研究』(ちくま文庫　一九八八年) 一四二頁～一四五頁
(8) 『ザ・フォト　祇園祭』(京都書院　一九八六年) 一〇五頁
(9) 脇田晴子『中世京都と祇園祭―疫神と都市の生活―』(中公新書　一九九九年)
(10) 谷川健一「民話と御伽草子、その相互照射」『國文學　解釈と教材の研究』第二十二巻十六号 (學燈社　一九七七年)
倉本四郎『鬼と宇宙誌』(平凡社ライブラリー　一九九八年) 四六頁～四九頁
(11) 高橋昌明『酒呑童子の誕生』三四頁～三五頁
(12) 別名「香取本」『続日本絵巻大成』(中央公論社　一九八四年) 所収「大江山絵詞」
(13) 高橋昌明『酒呑童子の誕生』二六頁
(14) 塙保己一編『群書類従　第二十四輯』(続群書類従完成会　一九八三年) 二〇〇頁～二〇六頁

(二〇〇〇年　卒業)